斬り裂くのは
運命と識れ

池田怜悧　著
Illustrator　藤岡ると

★注意★
成人向け表現ございますため、18禁となります。
オメガバース設定あり

◇登場人物紹介◇

■鹿狩統久（かがり　すべく）
27 才 Ω　　185cm 72 キロ
父親は警察局の警視総監。
性判定される前は長男であり、跡継ぎとして育てられていた。
ざっくばらんの後ろ髪が少し長めの黒髪、黒目、鍛え抜かれた身体。浅黒い肌。
愛嬌のあるイケメン。見た目通り、豪快、剛勇の性格。

■セルジューク･桑嶋（くわじま）24 才　α
180cm 68 キロ
赤みがかったツーブロックの髪、黄土色の三白眼。
次期副局長候補と言われていたが、頓挫したことと今回の人事に不満がある。
優秀だが、家柄がよくなかったため苦労してきた。

■鹿狩歩弓（かがりあゆみ）25 才　α
180cm 65 キロ
オールバックの黒髪、メガネ。
運命の番である兄を一途に想っているが、相手にされていないのか避けられ続けている。
捜査局局長。実力、才能ともに次期総監と目されているが、長年培った兄の統久に対する劣等感が強い。

■フレッド･ゴルデス　24 才　α
175 cm　63 キロ
桑嶋の同僚。
金髪･碧眼で勲章に対してかなりのこだわりがある。

【設定】オメガバースとは
※作者自身で作ったこの世界観のみ通用する設定もあります。

■6種類の性別があります。
男女の性の他に3種類の性が第二の性として存在します。

※本作では人類が宇宙に出て、女性が希少になったことによる種の保存の法則でできた性別としてます。

α(アルファ)性：容姿・能力が β や Ω より優れリーダーシップをとるタイプが多く、
社会的地位も高い人間が多い。
β (ベータ)性：いたって一般的な普通の人種。
Ω (オメガ)性：男女ともに相手がどの性別であっても妊娠ができる。
かなりの少子化のため、希少人種として女性とともに大切にされているが、
性欲のみになる発情期の状態からの差別もひどい。
約三ヶ月に一度発情期(ヒート)が 10 日～二週間ほど訪れる。
発情期は抑制剤を飲むか、α 性の番と性交渉するかしなくてはおさまらない。
抑制剤は高額なため裕福でなければ使用できなく、番がない者で働く人間は
少ない。

■妊娠について
女性と Ω 性が妊娠できます。
Ω 性は α・β 男女問わず妊娠可能です。
世間的には女性と Ω 性、Ω 性と Ω 性(※生殖能力者同士)が結ばれることは禁忌となっています。
女性 α と女性 Ω は認められてはいますが、希少同士のため前例はないです。
また、三親等内での番も血が濃くなることと、子供が生まれにくいことから禁忌となります。

■番について
α 性が番のいない Ω 性の首筋を噛むことで、番が成立する。
一度番になると、Ω 性は発情期を番と性交渉することで収めることができるようになる。
番以外の男と性交渉すると体が拒絶し吐き気等がおさまらず体調を崩す。
α からの番の解消は可能だが、解消しても Ω が新たな番を作ることができない。
事故で番になったりしないように Ω 性は首筋にコルセットを巻いているのが普通である。

■運命の番について
運命の番は中でも相性がいい Ω と α 同士のことで、平常状態でも近くに寄れば発情状態を引き起こすほどに互いにフェロモンが溢れる相手である。
通常 Ω は番を得れば他の α にフェロモンを感じさせることはないが、運命の番の α だけには別で強くはないが違うかおりを感じることができる。
そのため略奪愛などの修羅場もたまにおこっている。
また番のいる Ω は、運命の番と性交渉しても発情期はおさまらない。

◇

兄の泣き顔など、その時まで生まれてこのかた見たことがなかった。

窓から吹き込んできた夜の風に、とてもいいにおいがして深夜に起きてしまった彼は、誘われるようにベランダを伝って窓から入った。薄暗い部屋の中、かおりのするベッドの方へと近寄ると、兄が横たわっていた。

容姿端麗な兄は誰よりも優秀で、彼にとっては自慢で憧れだった。いつもは学校の寮にいる兄が、熱があって自宅で療養していると母は言っていた。兄は、中学へ入るとすぐに実家を出て寮で暮らしていて滅多に帰ってこなかった。兄が大好きだった彼にはひどく寂しく思えていた。

眠っている彼の兄の顔は火照っていて、呼吸がいつもより早いように思えた。じわりと汗の浮かぶ肌からは、嗅いだことがないとてもいいかおりが発せられていて、触れると熱が増して体が痺れるように、彼自身の息もどんどんとあがった。

甘い息を魘される様に吐いて、少し汗ばんだ肌の様子を眺め、これを欲しいと自分が欲情しているのがわかり、兄がオメガであり、発情期になっているのだと気がついた。

学校で教わった性教育の通りに、兄から溢れ出ているフェロモンを嗅いで、アルファ性である自分が欲情しているのである。いままで当然のように自分と同様に兄のことはアルファ性であると疑っていなかった。それだけ、兄は優秀で自分よりも優れていたし、他の誰よりもカリスマ性のようなものを持っていた。

誘われるように唇を舐めて覆いかぶさると、ようやく目覚めた兄が彼自身を見上げ、抗うように必死で腕を伸ばして胸元を押し返そうともがく。いつもは桁違いに力強いのに力が入らなく脱力しているようで、まるで子供のような力しか感じ取れない。

兄自身でさえそれに信じられないような恐怖したかのような表情で、彼を首を振りながら見返していた。

そんな顔しても、逃さない。

考えるよりも先に、彼は兄が着ているパジャマの上着のボタンを、逆にいつもなら出ないくらいの力で引きちぎる。 まるで身体能力が逆転してしまったかのような錯覚にさえ陥る。

兄は必死に首を振りながら、乱暴を働く弟の腕を引き剥がすこともできずに見開いた目から涙を流す。

やめてほしいと何度も上ずった声をあげるが、彼はぐっと掌で押さえ込んでその大きな体を動けなくする。本能のままに肌を空気にさらさせ熱にうかされた体を開かせ、指を押し込んで内部をさぐる。

彼は、衝動が何かもわからないまま湧き上がる屹立を押し当てて、その腰を掴んでより深い場所を突き上げた。

腰をのけようと必死に身を捩って逃れようと身をずりあげるが、バランスを崩して身体が反転する。

見上げる形になって、彼はその腰に腕を回して抱きつき腰をぐいぐいと突き上げる。

「兄……様……っ、すご……い、きもち、いい」

「ァ、ッアアアッ、ハッ……んッああ……おねッ……がい、あ、……あ、ああ、あゆみ……ッ……やだ……やめ、ろ…あああ……」

普段のキリッとした王子然とした兄の姿はなく、拒絶の言葉とは裏腹に涙の痕が残る目元に蕩けるような表情を浮かべ、抗えずに胎内へと呑み込んだ欲を享受して腰をひきあげる。ひくひくと全身の肌を震わせて、淫らに腰が揺れ中を擦りつける様に動きを奥までねだるような動きを繰り返す。

あたたかい……すごい……。

これは、僕のものだ。

その欲望が何なのか、まったく彼は理解などしてなかった。兄は美しい鍛えられた肢体を、この身体の上で仰け反らせて、噎せ返るくらいに甘い匂いを纏わせて、声をあげてしゃくりあげる。

官能に支配されたように、脚を開いて要望に溺れて身体を汗と体液に蕩けさせている。尊敬と敬慕しか抱いたことのない、憧れてやまなかった彼が、まるで淫らな獣のようになり果て裸で跨り、声をあげて自分に赦しを乞いながら、腰を揺さぶり快感を引き出そうとしている。

「ご、ごめ、んッ……ッ……ッく、あ、ァア……ッく、あゆみ……ッ……ごめんな……ごめん……」

兄が必死で繰り返す謝罪の言葉も甘い吐息に消えてしまい、降ってくるような甘い匂いに彼は頭の中をぐるぐるに溶かされてしまっていた。

唇を合わせて舌先を絡めて吸い上げて、兄のすべて取り込みたいかのように唾内を舐めあげ唾液を飲み込む。

「兄様、すごい。ああ、きも、ちいい……ンあ、兄様、兄…さまの中……すっごいあつい……わかる、ぼくが、なかにはいってる、にいさまも、きもちいい？」

すでに抗うこともなくきゅうきゅうと内部に埋められた肉を食んで、理性を飛ばした表情で腰をくねらせながら、問いかけに兄は答える。

「……ァ、ふ、ああッう……あ、あァ、ああ、きもち……い……いい……なかッ、あ、ゆみ……イイッ……」

においの効果にか甘く蕩けた表情のまま、兄は弟に快感に溺れたような甘美な笑みを浮かべる。

ぐっちゃぐっちゃと熱に蕩けた肉を攪拌して、内部を抉りあげてはコツコツと叩き快感の波へと突き落とす。

もっと欲しいのだと両脚を拡げて、本能のままに腰を振り乱して淫らに悶えて咽び泣く兄に、次第に彼は夢中になっていった。

本能が、心が、身体が叫んでいた。これは運命だと。
この人のすべては僕のものだと。
この兄が、僕の運命の番だと分かってしまっていた。

目が覚めた時に、兄が目の前から消え去るだなんて、彼は、まったく知る由もなかったのだった。

◇

「それじゃあ君が、ヒートに耐えられずに弟を襲ったというのだね」

医師の確認するような言葉に、彼は憔悴しきった表情で何も言わずに、ただ頷いて肯定する。
背後で聞いていた母親が泣き崩れる声に、ちらと振り返り、彼は少しだけ眉を動かしたが表情を変えることはなく、黙ったままそれ以上には弁解すらしなかった。
彼は大人びた表情をしていて、パッと見た印象では学生という歳には見えない。精悍な男らしい面立ちは端正であるが、愛嬌のある少し下がった目元は女性受けしそうな愛嬌がある。堅めな黒髪は後れ毛が肩に掛かる程度で、すっきりと清潔そうに整えられている。
とてもではないが、一目では性犯罪を犯す人物には思えない。ただ一点、彼がオメガであるということを除けば、そんな要素は他にはまったく見当たらないのである。
医師は、端末に映し出されたカルテにオメガであること故の本件の異常行動と今回の見解を記すと、溜息を吐き出した。
彼が関わっている団体や学校から提出された素行調査票では、一様に勉学やスポーツ、また対外的な活動において完璧ともいえる優秀な人間であることが記されている。 目の前の彼を見ても、それが全て真実であるといえた。